

シャーロック・ホームズ魅力の世界 コナン・ドイルは本当にカトリック信仰を 捨てられたのか

田中 喜芳

1. コナン・ドイルの実像と虚像

コナン・ドイル (1859-1930) といえば、もちろん、名探偵シャーロック・ホームズ・シリーズの作者として知られる。しかし彼が書いたのは「ホームズ物語」だけではなく映画「ジュラシック・パーク」の元になったSF作品『失われた世界』や『白衣団』のような歴史小説、医学小説・心霊主義関係の本など幅広い分野に亘っている。

それらの中に1編だけ幕末の横浜を舞台にした短編小説がある。1892年11月12日付の「ハーパーズ・ウィークリー」に発表した「ジェランドの航海」だ。物語中に記述はないが、幕末に今の大橋橋入り口付近にあった、ジャーディン・マセソン商会がモデルになっていると思われる。このことからドイルが幕末の横浜に興味を持っていたのは確かなようだ。

ドイルのフルネームは、アーサー・イグナチウス・コナン・ドイル (Arthur Ignatius Conan Doyle: 以下「アーサー」と呼ぶ) という。コナン・ドイルというのは、コナンが名前でドイルが姓だと思っている人も多いのではないかと。しかし、実際はコナンもドイルも姓なので、コナン・ドイルは複合姓というわけだ。紙幅の関係から詳細は割愛するが、彼の名付け親になった父方の祖父ジョン・ドイルの妻の8歳下の弟、マイケル・コナンが自分の姓をアーサーの名前に付けたのだ。このマイケルこそ、後にアーサーのカトリック信仰と大きな関りをもつ人物である。

アーサーは1859年5月22日にスコットランドの首都エジンバラで、父チャールズ・アルタモント、母メアリ・ジョセフィンの長男 (第3子) として、熱心なカトリック教徒の家に生まれた。チャールズは王立建設院に務める公務員だったが、兄弟たちは父ジョン (アーサーの祖父) も含め、皆、美術界では名を成した人たちだった。そこで彼も美術の世界で名を成したいと思ったが叶わず、やがて酒に溺れていき、ついにはアルコール依存症で

目次 兼 研究発表リスト (その46)

第440回 2023年2月18日

『シャーロック・ホームズ魅力の世界』

コナン・ドイルは本当にカトリック信仰を捨てられたのか …… 田中 喜芳 … 1

第441回 2023年3月18日

『ウクライナ・ロシアの宗教的文化的背景』 …… 近藤 喜重郎 … 3

第442回 2023年4月15日

『フルベッキが伝えたかったこと』 …… 井上 篤夫 … —

第443回 2023年5月20日

『日本人の内面性と国家主義の残存』

—C.D.ホルトムの視点から— …… 原 真由美 … 6

編集後記 …… 8

精神病院に入院、結局、彼はそこで一生を終えることになる。

時計の針を少し戻そう。アーサーが小学校入学前には、すでに父のアルコール依存症がひどくなり、母親は友人のメアリー・バートンの家にアーサーを預けた。小学校を卒業したアーサーの進路はマイケル・コナン夫妻と母親が相談した結果、彼を将来、聖職者にすべくカトリック教会イエズス会の寄宿学校であるストニーハースト校に進学させることが決まった。

ストニーハースト校でのアーサー

アーサーは1868年（9歳）から1875年（16歳）まで7年間に亘ってストニーハースト校で過ごした。最初の2年間はストニーハースト校に併設されている予科の「ホッダー校」で学び、1870年から75年までの5年間をストニーハースト校で学んだ。

自伝『わが思い出と冒険』によれば、ホッダー校ではフランシス・カシディ神父が児童らに冒険小説を読み聞かせてくれるなど、アーサーは学校生活を楽しんだという。しかし、ストニーハースト校に進むと、活動的で反骨精神に溢れるアーサーは規律を押しつける教師らに反発するようになる。このため彼は他の生徒より懲罰を受ける頻度が高く、これが後にカトリック信仰を捨てる伏線となったともいわれる。さらに飛び級の結果、最終学年では3歳年上の同級生と机を並べていたことから友達も少なかったという。彼はストニーハースト校にいい思い出は持っていなかったようだ。

19世紀当時、非国教会の生徒はオックスフォード大学とケンブリッジ大学には入学できなかった。このため、カトリック教徒の生徒はロンドン大学による大学入学資格試験（London Matriculation）を受けていた。アーサーも1875年にストニーハースト校で行われた大学入学試験を16歳で受けて合格し、1年間、オーストリアのフェルトキルヒ校に留学した後、結局、将来は経済的に恵まれるだろうエジンバラ大学医学部に入学した。

アーサーがカトリック信仰を捨てた理由

1881年8月、アーサーは医学士と外科修士の学位を取ったが、この頃、一家の事情はさらに悪化していた。父チャールズはアルコール依存症専門の精神病院〈フォードゥーン・ハウス〉に入院し、ドイル家の家計はさらに圧迫していた。

どうするか迷っていた時、父の姉、アネット伯母からロンドンの家に来るようにという手紙が届いた。彼女は生涯独身で若い時に在宅のまま修道女になったが、アーサーの父も含め弟たちに対する影響力は強かった。アーサーの洗礼式では教母（Godmother）を務めた人物だ。

手紙には、あなた（アーサー）の将来について話をしたいと書いてあった。ハイドパークに近いケンブリッジ・テラスの立派な家は、かつては著名な風刺画家だったアーサーの祖父、ジョン・ドイルが住んだところだ。彼女の申し出は、医院を開業したいと思う土地が決まったら、知り合いのカトリック教徒の名家や聖職者らに名前を売り込んで宣伝してくれるというものだった。

アーサーはアネット伯母や伯父たちの信頼と寛大な気持ちに感謝した。しかし、そうしてもらうことに問題が無かった訳ではなかった。幾つかのドイル伝を読むと、アーサーはこういう引き立てに預かることは偽善行為だと考えていたという。また、その頃、アーサーは自分を「不可知論者」だと考えていたようだ。このことは、すでに手紙で伯父たちに伝えており、彼らはアーサーの言動に驚きショックを受けていた。

今日、アーサーがカトリック信仰を捨てた理由として次のような各種要因が指摘されている。

- ・宗教教育に恵まれなかったこと（ストニーハースト校）
- ・最新の科学教育を受けて考え方が変わったこと
- ・ダーウィンやダーウィン論者の説を勉強していたこと

エジンバラ大学では“ダーウィンのブルドッグ”の異名で知られるトマス・ハクスリー教授にアーサーは共鳴していた。ちなみに、教授は「不可知論（agnosticism）」という新語を考え出した人物だ。アーサーにとって、この精神的危機は一時の熱などではなかった。

時が経つにつれ、この溝はさらに拡大していった。1895年に発表した自伝的小説『スターク・マンローからの手紙』（言視舎、田中喜芳訳）で「ぼくは立派なカトリックやプロテスタントをどれもみな尊敬していると心の底からいえるし、信仰の形式が万物を支配するという不可思議な摂理の手中にあって、力強い手段となってきたことも認める」と書く一方、「宗教だけが進歩せず、2千年前につくられた規範に未来永劫従うべきとされる思想分野なのだろうか。人間の頭脳が進化するにつれて視野が広まるという考えはないのだろうか」とも書いている。

しかし、ここでははっきりさせておくべき点は、アーサーは神の存在まで否定している訳ではないということだ。

2. アーサーは本当にカトリック信仰を捨てられたのか

それではアーサーは本当にカトリック信仰を捨てられたのだろうか。そこで、彼がカトリック信仰を捨てたといわれる後に書かれた全60編の「ホームズ物語」から事件に登場する聖句に注目したい。

「ホームズ物語」に登場する「聖句」とキリスト教関係の記述

●《緋色の習作》第3章

(本文) ホームズは死体に近づくとひざまずいて熱心に調べた。(中略)「あの事件を徹底的に研究することです。本当にするべきです。太陽の下に新しいことはありません。すべては前に起きています」(ホームズ)

(聖句)「かつてあったことは、これからもありかつて起こったことは、これからも起こる。太陽の下、新しいものは何一つない」

(旧約聖書、コヘレトの言葉 第1章9節)

●《バスカヴィル家の犬》第12章

(本文)「それに独自の計画も持っているしね。『明日の苦勞は、その日だけで十分である』。だが、その日がすぎないうちにやっとな優勢に立てる

と思っている」(ホームズ)

(聖句)「だから、明日のことまで思い悩むな。明日のことは明日自らが思い悩む。その日の苦勞は、その日だけで十分である。」

(新約聖書、マタイによる福音書 第6章34節)

など12作品に18の聖句や記述が登場するほか、「聖書」内のエピソードが事件のプロットになっている作品もある。アーサーはポーツマス市で開業医だった1880年代には既に心靈主義者だったことが分かっている。

三浦清宏著『近代スピリチュアリズムの歴史』（講談社）によれば、19世紀末の英国における心靈主義者の中には「万物の創造者である神を信じ、スピリチュアリズムを自分たちの信仰を補強する道具と考えた者があった」とあるが、じつはアーサーもその一人だったのではないかと考える。

以上、証明こそできないが、これまで述べてきたことから総合的に考えて、アーサーは終生カトリック信仰を捨てきれなかったのではないかと個人的には思っている。

ウクライナ・ロシアの宗教的 文化的背景

近藤喜重郎

1. はじめに

巷で所謂「ウクライナ戦争」と言う。が、この言い方は適切でない。

戦争といえば、多くの日本人は先の大戦を思うだろう。かつて日本人は、英仏米に倣い、植民地獲得のための対外戦争を始めたが、その結果は米国による恐ろしい空爆の連続であった。この経験から、戦争とは始めた国も甚大な攻撃に曝されるものであることを日本人はよく知っている。このことは、新教と旧教をめぐる戦争を何度も繰り返した西欧諸国民もよく知っているであろう。

昨年来、英米仏は露国への攻撃を行わず、宇軍にも行わせないことを早々にまた繰り返し宣言し、宇国大統領もこれに同意している。つまり、これは、日本人や西欧人の知る「戦争」とは似て異なるものなのだ。

2. ウクライナとロシアの現状

宇国と露国について、国土の広さ、都の近さ、国民の構成を紹介した。

露国は世界最大の広さを誇る。それと比べると宇国は小さく見えるが、欧州ではかなり大きい国である。両国の都は、日本で言えば、横浜から青森、または山口は萩の距離にある。だから、もしもキーウを滅ぼそうと思えば、露軍はできたはずであるが、しなかった。なぜなら、キーウは露国にとっても大切な「古都」だからである。

露国も宇国も多民族国家である。しかし、その構成が違う。露国民の5人にひとり是非白人だが、宇国民の九分五厘は白人なのである。また、露国民の中で2番目に多いのはタートル人であるが、宇国民の中で2番目に多いのは露人なのだ。

こうした国民構成が両国国民の間に異なる国との認識をもたらしている可能性がある。

宇国には、様々な宗教団体があるが、最大規模を誇り、かつ注目を集めているのは、正教会（英Orthodox Church）と呼ばれるキリスト教会である。しかし、これも4つの派閥に分かれており、その理解と把握が難しい。

これを理解するためには、宇国と露国の歴史のはじまりから解き起こす必要がある。

3. 歴史のはじまり

宇国と露国は、その政治的立場は別として、歴史のはじまりを共有している。今のキーウを都としたバイキングの国がそれである。

現在の宇国領土は、古来、遊牧民族が現れては、略奪と破壊を繰り返した土地である。ここに9世紀から北欧のバイキングが現れた。河川を使い、ギリシア人との交易をおこなう関係で、河川流域を征服し、都市国家（公国）を形成したのである。他方、黒海のクリミア半島には、ギリシア人の遺跡もある。このように、この土地は古来、諸々の民族が奪い合う土地柄だったのである。

この国を最初にまとめたのは、バイキングの一派リューリク家の人々である。このうち、10世紀末にビザンツ帝国の司祭から洗礼を受け、ビザンツ皇女を妻に迎えたウラヂミル1世が国の基礎を据えた。帝都コンスタンチノーブルの総主教は今

のキーウに府主教座を据えた。この国を人々は、ルーシ、ルシア、ロシアと呼んだ。

こうして、この国はキリスト教国となったが、そのキリスト教は、ビザンツ帝国のキリスト教、すなわち正教のキリスト教（英orthodoxy）である。

4. キリスト教の東西

正教のキリスト教は、ローマ帝国における迫害時代の教えを今に受け継いでいる。すなわち、1つの主教職、1つのユーカリスト、1つの教会である。

これは、特定の使徒の権威のみを認めた古代の異端とも、ただ1人の人物を神の子の代理人と認める旧教とも異なる。ゆえに旧教を批判して発生した新教諸派とも異なる。ただし、キリスト論や正典論などで旧教とも新教とも共有する部分がある。

古代ローマ帝国では、広大な帝国に広まった信者を管理するために、これを指導する教会をサポートした。こうして開かれたのが全地公会である。そこでは、主教職の位階制が整えられ、教会に独立と自治の別が設けられた。これは、大日本帝国の統治のもとに設立された日本基督教団の教職に牧師と伝道師の別があり、教会に一種と二種の別があるのと似ている。

5. 歴史の分岐点はどこに？

キーウを都としたルーシは、13世紀にモンゴル帝国の襲来を受け、都を破壊される。都にいたギリシア人府主教は、ルーシ北東部の町ウラヂミル（先のウラヂミル1世が建てた町）に移り住んだ。

モンゴル帝国の苛烈な支配をさして「モンゴル・タートルの軛」という。異教徒の支配下でルーシの民は、正教キリスト教の民であることを深く自覚したとされる。

モンゴル帝国は、ルーシの大公位を統治に利用した。すなわち、最も忠実に自分たちに利益をもたらす町の公に大公位を授けたのである。

大公位をめぐる諸公の争いに勝利したのは、モスクワ公である。そして、モスクワ公のもと諸公が結集してタートルの軛を脱した頃、ルーシの都のギリシア人府主教は、モスクワに移り住み、新

たにヨーロッパ諸国との関係を築き直して国の復興が行なわれた。この時期に、国名をロシアとし、ルーシは古名となった。

こうして、モスクワが新たなルーシ、ロシアの都となった。

同じ時期、ルーシ西部のヴォルィニに、かつてのノヴゴロド公が転封された。ロマン公である。彼は、南のハリチの公がなくなると、そこを征服、ハリチ・ヴォルィニ公国とした。さらに、キーウを征服し、キーウ大公を称するもキーウに定住しなかった。当時、キーウは名目上の都として諸公が奪い合う土地になっていた。

ロマンの国はその後、ポーランドとリトアニアによって征服される。さらに、東西教会の和解が模索された時代になると、ハリチおよびヴォルィニの貴族たちは、帰一教会の設立に同意する。これは、ポーランド領内に設けられた、ローマ教皇の裁治権を認めつつ、典礼様式と典礼言語は正教のものを使用する教会のことである。これにより、同地の貴族はポーランド貴族と同じ資格を持つこととなった。

これに現地の民と修道士らが反発し、東ローマ帝国帝都の総主教も反発した。キーウの町に府主教座を再建したのである。

ポーランドに対する反発は、対ポーランド独立闘争に発展する。結果、ポーランドは、かつてのルーシの中の征服地を自治区とし、ヘーチマンという、日本の将軍職にも似た地位を認めるも、今度はヘーチマンが、独立戦争を始める。ただし、ヘーチマンは近隣諸国に協力を要請した。

ヘーチマンの要請に同意した国家の中にモスクワを都としたロシアがあった。モスクワの人々は、ヘーチマン自治区の民が自国民の同胞かつ同心であることから、当時の大国ポーランドとの戦争を決断する。ところが、ヘーチマンは、スウェーデン王にも同じ協力を要請しており、かつモスクワへの攻撃をも要請していた。これを受け、モスクワとワルシャワは講和し、スウェーデン軍を退け、ドニエプル川を境として国境を定めた。キーウを除く川の西部はポーランド領、キーウ及び川の東部はロシア領となった。

以後、独立闘争は文化的な側面と軍事的な側面

とで繰り返された。このうち、有名なものが1918年以後の内戦時の闘争である。この時、民族主義に立ち独立を目指した人々の前に立ち塞がったのは、男女平等・民族差別の撤廃を目指す社会主義派の人々であった。彼らの闘争は社会主義派が勝ち、その後も多くの優秀な人材をモスクワへ送り出すこととなった。

民族主義派の人々は、対独戦ではナチスドイツに協力するも独立を認められずに失敗し、ソ連解体によって悲願を遂げる。この時期、キーウの府主教は、主教職の位階制にある最高位の総主教位を主張するも、どの総主教もこれに同意せず、多くの同僚また信者もこれを支持しなかった。

おわりに

宇国における正教会は、ソ連解体後、次の4つに分かれていた。モスクワ総主教の管理を認める自治教会、かつての東ローマ帝国帝都コンスタンチノーブルの総主教の管理を認める自治教会、キーウの主教の総主教位を主張する独立教会、ローマ教皇の裁治権を認める帰一教会である。このうち、コンスタンチノーブルの総主教の管理を認める自治教会とキーウの主教の総主教位を主張する独立教会は、宇国前大統領の斡旋によって合同し、コンスタンチノーブル総主教の権威のもとで独立を宣言した。本発表時点で、モスクワ総主教を含め他の総主教はこれに同意していない。

興味深いことに、教会独立のために尽力した宇国の前大統領は、教会合同の翌年に行われた選挙に負けている。かつての貴族と言ひ、現代の大統領と言ひ、政治家は宗教を民心操作のために利用しようとするが、宇国民はかつても今も冷静にそれを見ているのである。

いまは兄弟国となった、かつての同胞にして今も同心であるウクライナとロシアの人々が、政治家の思惑から離れて、平和に暮らせる日が1日も早く来るよう、世界中の人々が、正教のキリスト教のことを理解して、和解のために知恵と力をひとつにすることを祈念している。

その後の質疑応答では、様々な質問をいただいた。記して感謝申し上げます。

日本人の内面性と国家主義の残存

—D.C. ホルトムの視点から—

原 真由美

1. はじめに

太平洋戦争敗戦後のGHQ/SCAPの数々の施策は、日本の戦後の出発点になっている。この施策にアメリカのバプテスト派宣教師ホルトムの研究は、深く関わっており、GHQ/SCAPの日本政策に影響を与えた。この施策の根幹の一つである「神道指令」は、太平洋戦争後の日本民主化に繋がる一ステップとなっている。ホルトムは、アメリカ人でキリスト教バプテスト派の宣教師であると共に、日本の宗教である神道研究の、第一人者であった。

ホルトムが日本に到着したのは、日本が国家主義を標榜しはじめ韓国が併合された年であった。来日早々、見聞きしたのは当時の日本人の内面的な精神に神道が深く影響を及ぼしていたことであり、それに疑問を抱き探求するの必要を感じたことから、研究に着手している。

本研究ではアメリカのバプテスト派宣教師ホルトム(D.C. Holtom)の日本研究から見た日本の「国家主義」に対し、1943年カリフォルニアで行われたアメリカ太平洋問題調査会で発表された「日本人の内面性」の資料を中心に日本の国家主義、日本人の原始性、そして敗戦後の国家主義の残存、アメリカが推し進めた民主主義の現在についての経緯を検証してみた。

先行研究としてはアメリカ人の宗教学者 Avery Morrow の *Patriotism, Secularism and State Shinto- D. C. Holtom's Representation of Japan*、他。

本研究は、おもにカリフォルニア、クレアモント大学の貴重図書ホルトムコレクションの一次資料から、エキュメニカルで進歩的な雑誌クリスチャン・センチュリー の *Holtom Japanese Christianity and Shinto Nationalism* シリーズとアメリカ政府機関の AMERICAN COUNCIL, INSTITUTE OF PACIFIC RELATIONS の機関誌 *Far Eastern Survey* を中心に考察した。

2. ホルトムの研究に見る背景

(1) 前回の発表でも紹介したが、ホルトムはバプテスト派の宣教師で日本の神道研究家でもあった。太平洋戦争が勃発し1942年の第一次交換船でアメリカに帰国するがアメリカ民間研究機関の太平洋問題調査会 (Institute of Pacific Relations (IPR)) の研究員となっている。

「日本人の性格構造」に関する IPR 会議についてアメリカは1944年6月日本の敗色が濃厚となっていたが、戦争の勝利が見える中で、客観的に日本人の精神構造の特徴を正確に把握する必要があった。

1944年12月にアメリカ IPR の呼びかけにより人類学者や社会学者、極東専門家が参加し「日本人の性格構造」に関する IPR 会議が行われる。

(2) ホルトムの研究に見る日本の国家主義

太平洋戦争中、アメリカの最高司令官であるマッカーサーは善戦を重ねていた日本軍のことを軍隊ではなく熱狂者と闘っていると言いつけていた。

ホルトムは、このようなアメリカの情勢にあって、1943年にカリフォルニア、パサデナ大学の研究会で戦争中の敵である日本について「日本人の内面性 (Inside the Japanese mind)」の研究発表を依頼され行った。

The Christian Century, January 14, 1942, 35, 36.

その発表の中で日本人の特徴を表すとすると中世的な原始性であると述べている。その原始的な性格が現代にも残っており、日本人全体の国民的な特性として中世時代を引きずりながら生まれて土着したままの状況を表している。また、日本人の残忍とも言える特徴は、長い期間を通じて個人そして社会から特別に孤立した状況にあったことにより生まれたと捉えていた。

260年間、徳川幕府の厳しい鎖国政策により、このような土壌から生まれた近代政府(明治政府)は、排外主義、国家主義を醸成しやすく国家的な危機が迫ると、孤立のため排他主義の古い慣習の道へと戻ってしまったと捉えていた。

(3) 日本人の原始（中世）的な性質

ホルトムは、この原始（中世）性を4つの例をあげて説明しその特徴を次のように捉えた。

1) 人種の優位性の誇張

文化移入がされていない地域の人々ほど自らの唯一性や優越性を誇りがちであるという指摘である。第一次世界大戦前に東京帝国大学の教授で日本の近代日本作家の一人によって著述された表現の中に、「日本人は日本人らしく行動し、その信じることのために生きも死にもする」という日本人という人間の見解が示されている。（国体の本義）

2) 生産的な努力よりも略奪活動への依存性の特徴。

日本のみならず近代戦争の勝利は生産的なものではなく、他の人達の労働の実りを武力によってその成果を奪い取ることが最善であるという信念を強めた。これが軍隊を強く推し進めることを確信させていったのであった。それ故、当時の日本の軍人は社会的にも高位に位置付けられていた。

3) 日本人の権威に対する考えへの影響

個人の責任として捉えるのではなく、集団支配者の権威に寄りかかる慣習があった。権威への宣誓という慣習としてのその集団への同一性があったことを意味し、個人の責任の喪失に伴い、他の人を思いやるという感情の欠如を生じさせた。

4) 死に対する受け止めかたと態度

日本兵は降伏するかという問いに、降伏は恥という言葉が立ち塞がっていた。中世の戦では、兜首を取ることが日常であったが首狩りの風習があった。ホルトムは、太平洋戦争という近代戦が始まる以前に、日本人の死に対する態度と残虐性を理解していたと推測できる。

(4) アメリカの覇権主義とキリスト教会

アメリカが戦争に勝つだろうと確信し始めてからは、アメリカの覇権が確立されていく時代を目前にして米国の教会が目指すべき平和がどのような

ものかについてエキュメニズムな雑誌クリスチャン・センチュリーで「アメリカのキリスト教会の求める平和、新世界秩序」シリーズで論じられている。

Vankirkの説明（国営ラジオ放送コメンテーター）イデオロギーの排他性なしに、ドイツ人、イタリア人、日本人を粉砕し、それぞれの国家を切り刻もうとしている人達に平和をまかせるならば第三次世界大戦につながるプロセスは第二次世界大戦が終わったその日から始まることに繋がることになる。国際的な行動におけるキリスト教倫理は、神の子としてすべての人間が有する権利、特権、自由をあらゆる場所で達成するための世界的な努力を必要とするように思われる。

Walter. W. Van Kirk Christian Century Jan 14, 1942

Vera Brittain（作家・平和主義者）

第二次世界大戦の直前の数年間に多くの平和主義者やその考えに近い運動が起こったのは教会の力不足を認識してのことであつたと思われる。全体主義が生まれたのはキリスト教の教えをナショナリズムの信頼に置き換えてしまったことである。アメリカの教会は奴隷制、不節制、戦争に対して抗議してきた。これはキリスト教を語る国教会が存在せず、アメリカの自由教会が戦争推進政策に頑強かつ広範囲に反対したのは国教会の不在であつたためである

Christian Century Feb. 1942

このようにアメリカの教会にはさまざまな考えがあつたが、イデオロギーの排他性を指摘し、排外主義や覇権主義とは立場を異にする教会の求める新しい時代の平和と秩序を模索していることがうかがえる。

(5) ホルトムの見た日本のキリスト教

1) 明治維新後の日本人指導者層の志向には、和魂洋才がありキリスト教も洋才の一つとして取り入れた。

2) 日本の教会は、キリスト教の宣教地における教会の政治形態について外国ミッションから独立し、自立した日本のキリスト教会を創ろうとする傾向に向かつてしまった。

3) 日本人の資質として日本の旧来の大家族主義に根差す封建思想、社会構造や社会制度による依存的・隷属的体質が残り、日本人の思考に内在していた思考形態からキリスト教が独自解釈される。

3. 日本人の国家主義観の残存

GHQ/SCAPは、占領改革を天皇の権威を用いて占領の円滑化をはかることに固執し天皇から国民への主権の移動を天皇の権威を利用する結果となった。そこには敗戦後の日本の方向性を見る上で重要なポイントとしてGHQ/SCAPの施策により改善されたはずであったが、象徴天皇制とマッカーサーによるその施策の不徹底さにより改善されずに問題が残されていたことが指摘されていた。その一つは民主主義に対する理念の確立であった。日本の軍事化と民主化に力点を置くソ連との関係悪化に伴い、アメリカの不十分な施策は、日本に問題点を残してしまった。

(1) 民主主義と国家神道

アメリカのGHQ/SCAPは太平洋戦争が起こった起因を、天皇を中心とした国家主義的な体制によるものと見ていた。ホルトムが来日した1910年は日本が朝鮮半島を侵略し韓国を併合、国家主義の基に軍国主義へと突き進む時代であり、昭和初期はとりわけ日本が外国からの自立や影響力を排除するための対外政策をとっていたことと日本人の精神的要因と根源が、超国家主義、国家神道であることを究明していった。

4. まとめ

日本の積み残した課題への評価は、ホルトムが1947年に指摘していた ①国際的な民主主義への成長 ②男女の同権問題ほか教育にもあったが、戦後80年になろうとする今でも、日本人個人の精神的内面にまで変化が及ばなかったことが判る。

また、GHQ/SCAPの政教分離政策についても、アメリカが太平洋戦争後に起きた冷戦のために日本統治の政策としての積み残しが生じ、「神道指令」の不徹底さにより国家主義の残存を許してしまった。かつての日本で国家神道に対して忠

誠を示すことが「善い日本人」の要件であったが、この国家主義は日本人が他の世界宗教に携わろうと時にも組織的、構造的勢力として一人ひとりの精神状態や行為を支配する古い典型が現代の時代にも残されていることを警戒し今再認識する必要があると考える。

戦後の歩みを危惧し、日本における民主主義の発展と、男女の同権がどの程度成熟したかについては、それが普遍的で民主的な世界精神が息づくかどうかの指標となると見られたからであるが、この点はどの程度達成されたのであろうか。

日本人の精神性について注意喚起をしたホルトムの指摘は、有事に揺さぶられた際に、国土、国難という概念から、精神的均衡を保つために国家的忠誠心と愛国主義が結びつき日本人にとってその遂行のために軍隊がいつ何時正当化されるともかぎらないことを複眼的にみていくことは重要な視点と考える。

【編集後記】

コロナが収束したのか、生活様式が戻ってきた。研究会は密を避けるとして、指路教会会堂を使用してきたが、6月より1階の集会室に戻した。ZOOMでの配信は、高齢者や遠隔地の会員の参加を可能とするため継続する。現在ではZOOMやパワーポイントは不可欠のツールとなってきた。送る側も受ける側も技術的に不慣れもあり、しばらくはお互いに寛容にご容赦願いたい。

今号は今年の2月から5月までの研究発表について掲載。田中氏のコナン・ドイルのカトリック信仰の考察、近藤氏のウクライナとロシアのキリスト教、原氏のホルトムである。

ウクライナの戦争は宗教戦争とは思っていないが、当事国の意識は複雑であることを教えられた。戦後の日本占領政策にホルトムの研究が関わっていたことを知り、バプテスト宣教師の幅と奥深さを実感する。

コロナとウクライナ戦争は、人間と世界を大きく変えてしまった。世界は不安と恐怖を抱えて、新たな戦前の時代になってゆくのか。百年前の1920、30年代と似ているようにも見えるのだが。そして世界は温暖化から沸騰の時になったという。(花鳥)